

## 第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動

第7章では、「少数派—多数派」という集団サイズの点で格差が見られる集団間関係において、両者がどのような集団間行動を示すのかを最小条件集団パラダイムを用いて検討する。あわせて、研究1で得られた社会的カテゴリーの基本類型をもとに、社会的カテゴリーの性質と集団間差別行動の関連を検討する。すなわち、研究2では「符号による社会的カテゴリー」としてくじ引きを、研究3では「価値性に基づく社会的カテゴリー」として社会的態度をカテゴリー化基準として用い、少数派および多数派を設定する。

### 7.1 偶然性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動【研究2】<sup>2</sup>

研究1では多様な社会的カテゴリーが3つのクラスターに分類されることが明らかとなった。そのうち、研究2では、符号による社会的カテゴリーとしてくじ引きを用いる。くじ引きによって構成された社会的カテゴリーには、本来特別な意味があるわけではないが、ある社会的カテゴリーに割り当てられたということ自体が、成員にとって何らかの意味を帯びるようになる。現実の場面で言えば、学校のクラス分けは無作為になされるが、無作為に決められたクラス(社会的カテゴリー)の相違が、後の生徒の行動に影響を及ぼすことは、容易に想像できる。

加えて、本研究では、少数派と多数派という格差の見られる集団間関係の問題を検討する。従来の研究では、等質な集団間関係を扱ったものが多い。しか

---

<sup>2</sup> 吉田富二雄・久保田健市 1994 社会的カテゴリー化による少数派および多数派集団の集団間差別行動 心理学研究, 65, 346-354. (実験1)

し、現実には等質な集団間関係が見られることはまれである。さらに、現実の差別の問題などを考慮すると、少数派—多数派の集団間関係が最も典型的であると考えられる。

それでは、社会的アイデンティティ理論の観点から、少数派と多数派の集団間行動についてどのような予測が成り立つだろうか。社会的アイデンティティ理論では、個人が自身の集団性を顕在化させ意識化する程度に応じて、「内集団びいき—外集団差別」が示されると考える。そして、くじ引きという偶然性で少数派と多数派にカテゴリー化した場合には、次のような理由から、少数派が自身の集団性を意識しやすく、多数派は意識しにくいと予想される。すなわち、偶然性に基づくカテゴリー自体は、特定の価値性と結びついていない。そのため、集団性の意識化に影響を及ぼす可能性があるのは、少数派—多数派という集団サイズの格差自体の効果のみである。集団サイズの格差は、知覚論的観点から考えると、直接的に集団性の意識の問題に結びつく。なぜなら、少数派と多数派の関係は、知覚論における図と地の関係のようにとらえることができるからである。すなわち、より小さい少数派は、図として知覚されるため、少数派の集団成員性はより目立ちやすい(salient)。その結果、少数派は自身の集団性を意識しやすく、地である多数派との差異性を強調して知覚するであろう。これに対し、多数派は地として知覚されるため、自身の集団性は明確化しにくいと考えられる。以上の考えに基づくと、少数派は、自身の集団性を意識しやすいため内集団びいきを示すが、集団性を意識しにくい多数派は、明確な内集団びいきを示さないと予測される。

## 目 的

研究2では、偶然性(くじ引き)をもとに構成された少数派および多数派の集

集団間差別行動に関し、以下の仮説を検討することを目的とする。すなわち、偶然性により社会的カテゴリー化がなされた場合

**仮説1** 少数派は内集団をひいきし、外集団を差別するであろう。

これに対し、

**仮説2** 多数派は明確な内集団びいきを示さないであろう。

なお、従来の最小条件集団研究では、集団間差別の測定に、報酬や得点の分配課題が用いられてきた。これに対し、本研究では、他者(内集団/外集団)の選択という、より具体的な意思決定をあわせて実施し、集団間差別を多面的に検討する。

## 方 法

**被験者** 大正大学学生110人(男子83人,女子27人)。

**手続き** 実験は、授業時間を用いて、全被験者を対象に一度になされた。実験の流れをFigure 7.1に示す。被験者は、意思決定に関する心理学的研究であると教示され、実験の都合上いくつかの集団に分割するとして、くじを引いた。その後、いま行ったくじ引きでは、LとSのくじがそれぞれ80%と20%入っていたため、全被験者はおよそ80%を占めるL集団(多数派)とおよそ20%のS集団(少数派)の2つに無作為に分けられたこと、および、属する集団によって個々の被験者にコード番号が割り当てられたこと(L集団:800番台,S集団:100番台)などが教示された。実際には、被験者は2つの集団にほぼ等数に分けられた。それから、被験者は、集団成員性とコード番号のみが知らされた2人の他者(内集団成員と外集団成員)に得点を分配する課題を行った。分配課題に際して、実験者が与えた教示、および、被験者の行った選択の具体的内容は、以下の通りである。「例えば、災害に見舞われた方々や恵まれない子どもたちなど、個人的に

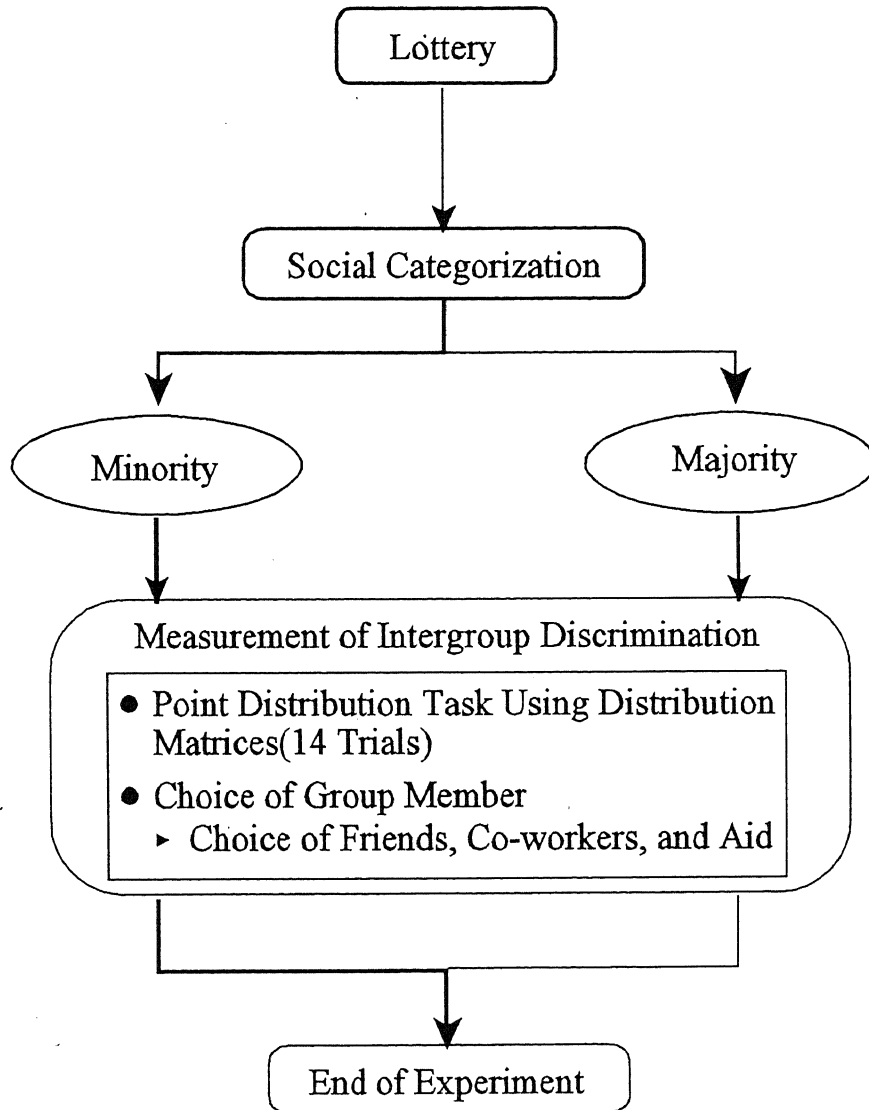


Figure 7.1 Flowchart in Study 2

はまったく見知らぬ人に援助や贈与を行うことがあります。そのとき、援助する対象が複数あれば、物資やお金をどのように分配するかが問題となります。この実験では、見知らぬ2人の人に、物やお金の代わりに得点を分配する課題を

行っていただきます。回答用紙に、いくつかの分配の仕方をあらかじめ定めた表(分配マトリックス)が書かれていますので、その中から最も適当だと思う得点の組合せを選んでください。最後に、集団成員の選択課題を行い、実験は終了した。

**分配マトリックス** 得点分配課題において、内集団びいきの測定には分配マトリックス(Tajfel et al., 1971; Billig & Tajfel, 1973)が用いられた。本研究では、(a)内集団びいき(FAV)、(b)内集団びいきvs. 公平性(FAV vs. F)、(c)内集団びいきvs. 最大共同利益(FAV vs. MJP)、(d)最大差異vs. 最大内集団利益+最大共同利益(MD vs. MIP+MJP)、の4種類のマトリックスをそれぞれ2タイプずつ用いた(Table 7.1)。

内集団びいきの指標には、Tajfel et al.(1971)に従いプル得点(pull score)を用いた。内集団びいきを直接測定するマトリックス(FAV)では、選択のランクの中央値(7.5)との差をプル得点とした。その他のマトリックス(FAV on F, FAV on MJP, MD on MIP+MJP)では、同一マトリックスにおいて、内集団成員と外集団成員の位置を入れ替えた2回の選択が行われ、その選択ランクの差をプル得点とした。プル得点は、同タイプの2つのマトリックスを足し込んで、4種類のプル得点が分析された。ただし、内集団びいきの測定に関し、プル得点を用いることに論議もあるため(Bornstein et al., 1983)、別の指標として内集団びいき得点(ingroup favoritism score, IFS)を用いた(Diehl, 1990)。内集団びいき得点は、被験者が内集団成員に対し与えた全得点と外集団成員に与えた全得点との差として計算された。

被験者は、合計14回の得点分配の選択を行った。その際、被験者は、自分自身に得点を分配することはなく、他の被験者が誰に、かつ、どのように分配するかを知ることはできなかった。また、分配の仕方に善し悪しはなく、各自で判断することが強調された。マトリックスの提示には、順序効果を打ち消すよう配慮した。

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
7.1 偶然性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

集団成員の選択 被験者は,(a)友人選択,(b)協働者選択,(c)援助者選択の場面で,他の内集団成員と外集団成員のどちらを選択したいか尋ねられた.

Table 7.1  
Distribution Matrices

1. Ingroup Favoritism(FAV)														
(A)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
(B)	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
2. Ingroup Favoritism vs. Fairness (FAV vs. F)														
(A)	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	
(B)	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	
	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	
3. Ingroup Favoritism vs. Maximum Joint Profit (FAV vs. MJP)														
(A)	25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1	
	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	
(B)	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	
	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	
4. Maximum Difference vs. Maximum Ingroup Profit+Maximum Joint Profit (MD vs. MIP+MJP)														
(A)	25	23	21	19	17	15	13	11	9	7	5	3	1	
	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	
(B)	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	
	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	

## 結 果

**得点分配行動** 内集団びいきを測定する4種類の分配マトリックスにおけるプル得点の平均値を少数派・多数派ごとにTable 7.2ならびにFigure 7.2に示す。「内集団びいき」については、「母平均値=0」を帰無仮説とする $t$ 検定,その他のマトリックスについては,Wilcoxonの符号つき順位和検定を少数派・多数派ごとに行った(5%危険率,片側検定. 以後の研究でも同様). その結果,少数派( $n=58$ )では,「内集団びいき」( $t(57)=4.53, p<.001$ )「内集団びいきvs.最大共同利益」( $z=-4.24, p<.001$ )「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」( $z=-1.74, p<.05$ )の3つで,有意な内集団びいきが見られた. 一方,多数派( $n=52$ )に関しては,いずれのマトリックスにおいても有意な内集団びいきは見られなかった.

また,内集団びいき得点についても平均値をTable 7.3ならびにFigure 7.3に示す. 同様に,「母平均値=0」を帰無仮説とする $t$ 検定(5%危険率,片側検定)を少数派・多数派ごとに行った. その結果,少数派のみが有意な内集団びいきを示した( $M=23.64, t(54)=3.94, p<.001$ ).

**集団成員の選択**3つの選択場面(友人選択,協働者選択,援助者選択)における内集団および外集団の選択率をTable 7.4ならびにFigure 7.4に示す. 各場面において,「内集団の選択率=.50」を帰無仮説とする二項検定を少数派・多数派ごとに行った. その結果,少数派では,友人選択および援助者選択で,内集団を有意に高い割合で選択した(順に,  $p=.001, .003$ ). 一方,多数派では援助者選択においてのみ,内集団を有意に多く選択した( $p=.009$ ).

以上の結果を見ると,少数派は,得点分配行動における4つの指標と,集団成員の選択における2つの指標で有意な内集団びいきを示した. これに対し,多数派で有意な内集団びいきが見られたのは,集団成員の選択における1つの指標のみであり,内集団びいきを示しにくかった. したがって,仮説1および仮説

Table 7.2  
Mean pull scores in Study 2

Pull Score	Group Membership			
	Minority <sup>a</sup>		Majority <sup>b</sup>	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
FAV	1.42***	2.39	-0.28	2.89
FAV on F	0.65	4.86	0.25	4.25
FAV on MJP	2.31***	3.45	0.29	3.85
MD on MIP+MJP	1.08*	4.20	0.32	

*Note.* The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

<sup>a</sup>  $n=58$ , <sup>b</sup>  $n=52$

\*  $p<.05$ . \*\*\*  $p<.001$ , One-tailed

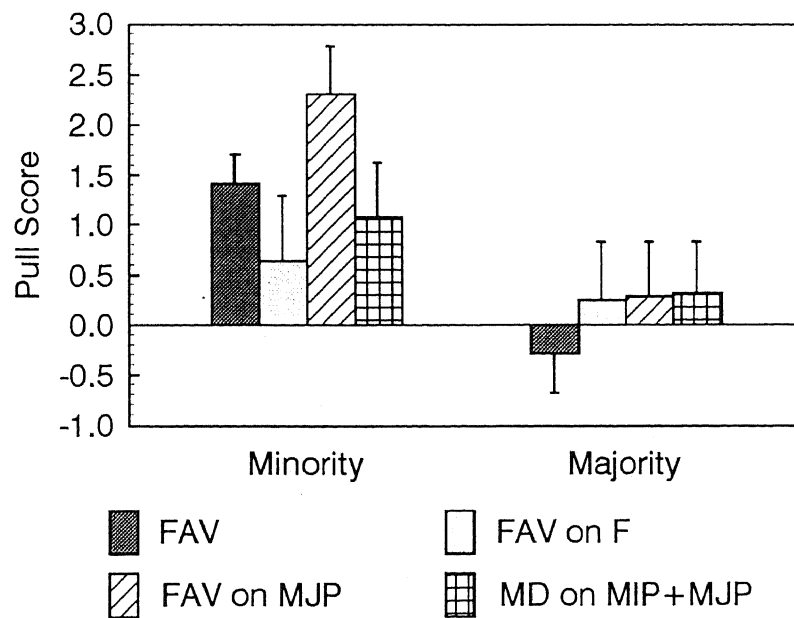


Figure 7.2 Mean pull scores in Study 2



Table 7.3  
Mean ingroup favoritism scores in Study 2

	Group Membership			
	Minority		Majority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
IFS	23.64***	44.54	3.33	48.60

*Note.* The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

\*\*\*  $p < .001$ , One-tailed.

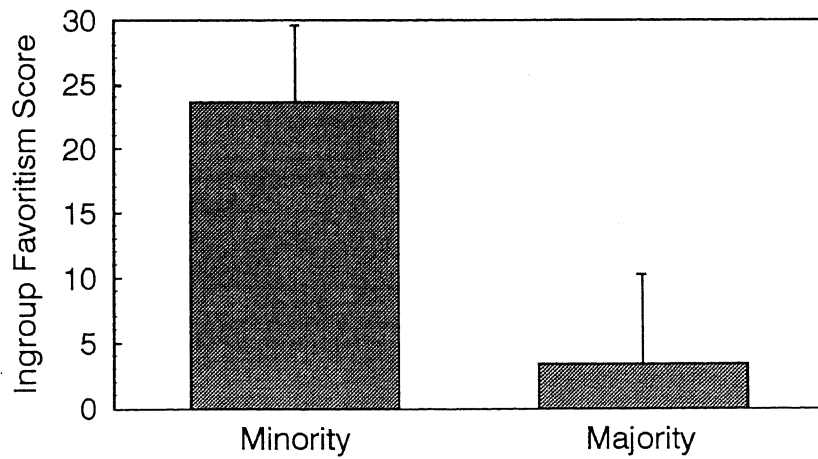


Figure 7.3 Mean ingroup favoritism scores in Study 2

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
 7.1 偶然性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

Table 7.4  
 Choice rate of group member for majority and minority

Target	Membership	
	Minority	Majority
Choice of Friends		
Ingroup	70.69	46.15
Outgroup	29.31	53.85
Choice of Co-workers		
Ingroup	58.62	57.69
Outgroup	41.38	42.31
Choice of Aid		
Ingroup	68.97	67.31
Outgroup	31.03	32.69

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
7.1 偶然性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

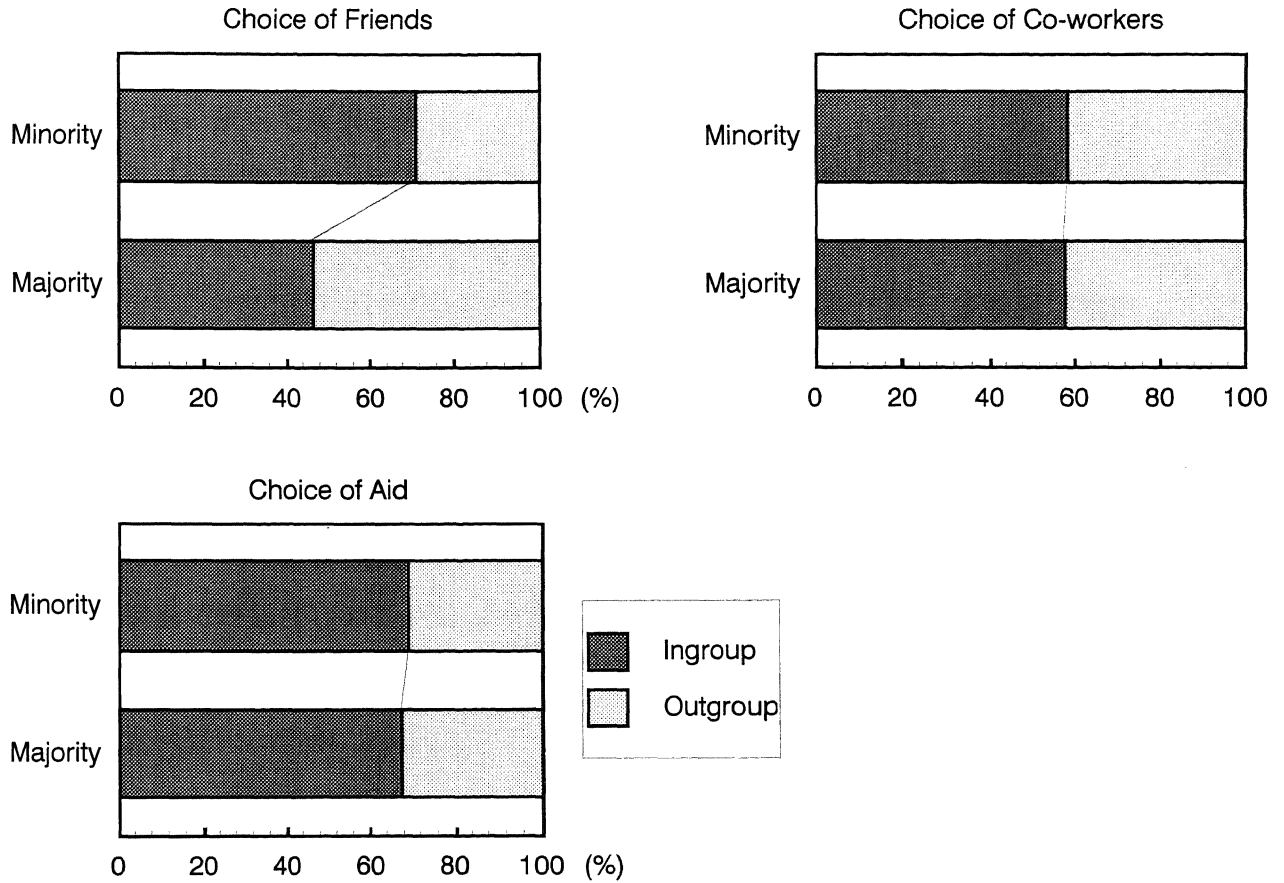


Figure 7.4 Choice rate of group member for the majority and minority in Study 2

2は支持されたといえる。

考 察

研究2の結果は,当初設定された仮説1「少数派は内集団びいきを示すだろう」および仮説2「多数派は明確な内集団びいきを示さないだろう」を支持するものと考えられる。すなわち,得点分配行動において,少数派は3つのプル得点および内集団びいき得点で有意な内集団びいきを示した。これに対し,多数派

## 第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動

### 7.1 偶然性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

では、いずれの指標からも内集団びいきが見られなかった。また、集団成員の選択では、少数派は2つの選択場面で、多数派は1つの選択場面で内集団を有意に高い割合で選択した。

この結果について、社会的アイデンティティ理論の観点からは、多数派より少数派のほうが自身の集団性を意識しやすかったためと解釈される。これは、より小さい少数派がいわば図のような存在として知覚される一方で、多数派が地のような存在とみなされる、という知覚論的観点から説明することができる。すなわち、少数派は、図として自身の集団性を意識しやすく、同時に外集団である多数派との差異性を意識しやすい。それゆえに、得点分配行動と集団成員の選択の両方で明確な内集団びいきを示した。一方、多数派では、集団成員選択の一場面で内集団びいきが見られたのみであり、地として集団性を意識しにくく、明確な内集団びいきを示しにくかった。このように、集団性の意識化は集団間知覚の過程と密接に関連している。

また、知覚論的観点のほかに、集団サイズに伴う心理的な勢力関係の観点からも、少数派と多数派の集団間差別行動の違いを説明することができる。すなわち、少数派は自らの立場をより弱く不利なものであるという印象を持ちやすいと考えられ、結果的に自らの集団性を意識しやすいであろう。一方、多数派は自身の立場をより安定したものとみなすため、集団性をあまり意識しなかったと考えられる。このような心理的な勢力関係の認知もまた、集団性の意識化に影響を及ぼしている可能性も考えられる。

こうした集団サイズ自体の効果は、本研究で扱った偶然性に基づく社会的カテゴリーで、より明確に現れると考えられる。一般に、社会的カテゴリーは、何らかの価値や属性に基づき、さらに別の価値や評価と結びつけられている。そのため、社会的カテゴリー化には、一般的に異なる価値の対立という要素が含まれる。しかし、偶然性に基づく社会的カテゴリー、あるいは、符号による社会的カテゴ

## 第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動

### 7.1 偶然性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

リーには、価値性や意味はほとんど含まれていない。それゆえに、これらの社会的カテゴリーでは、「どのようにカテゴリー化されるのか」というカテゴリー化の方法にかかわる要因の影響が強く表れるであろう。さらに、社会的カテゴリーの価値や評価とは結びついていないために、集団間行動の生起は、社会的アイデンティティの意識自体をより直接的に反映するものと思われる。

## 7.2 価値性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動【研究3】<sup>3</sup>

研究3では、価値性に基づく社会的カテゴリーとして、社会的態度で分けたときの少数派および多数派集団の集団間差別を検討する。集団へとカテゴリー化する基準が価値性を伴う場合、偶然性に基づく場合と異なり、社会的カテゴリー化は集団間の価値性の対立という要素を含む。その結果、2つの社会的カテゴリーは、より対比的にとらえられる。研究2で示したように、集団サイズの点から言えば、少数派は自身の集団性を意識しやすく、多数派は意識しにくい。しかし、研究3では、価値性の対立によって集団間の差異性がより顕在化するため、少数派だけでなく多数派もまた、自身の集団性を意識するようになると考えられる。したがって、内集団びいき—外集団差別という集団間行動は、少数派・多数派の双方で明確に見られると予測される。

### 目 的

研究3では、価値性を含む基準(社会的態度)で社会的カテゴリー化したときの少数派および多数派の集団間行動に関し、以下の仮説を検討することを目的とする。すなわち、社会的態度でカテゴリー化される場合、

仮説1 少数派は内集団をひいきし、外集団を差別するだろう。

仮説2 多数派もまた、内集団びいき—外集団差別を示すだろう。

---

<sup>3</sup> 吉田富二雄・久保田健市 1994 社会的カテゴリー化による少数派および多数派集団の集団間差別行動 心理学研究, 65, 346-354. (実験2)

## 方 法

**被験者** 大正大学学生88人(男子15人,女子71人,性について無回答2人)および筑波大学学生68人(男子25人,女子43人)。

**手続き** 実験は,大正大学と筑波大学で二度にわたり,授業時間を用いて全被験者を対象に行われた。実験の流れをFigure 7.5に示す。最初に,被験者は社会的態度に関する調査(学校でのエイズ教育に関する態度など6項目・8段階評定)に回答を求められた(Table 7.5)。調査の終了後,結果を集計するためとして,実験助手は退出した。20~30分後,実験助手は再び入室し,次のように偽の調査結果を報告した。「回答結果から,80%の人(多数派)と20%の人(少数派)があてはまる2つの態度傾向が見られました。両グループの社会的態度の内容については,自分の回答から推測してください」そして被験者は,自分がどちらのグループに属するかを個別に伝えられ,コード番号が割り当てられた(コード番号については,研究2と同様)。実際には,被験者は等数の集団に無作為に分けられた。その後,内集団と外集団に属する他者に対する得点分配課題と集団成員の選択課題が行われ,実験は終了した。

**従属変数の測度** 得点分配課題に用いられた分配マトリックスおよび内集団びいきの測度,ならびに,集団成員の選択の内容は,研究2と同様であった。

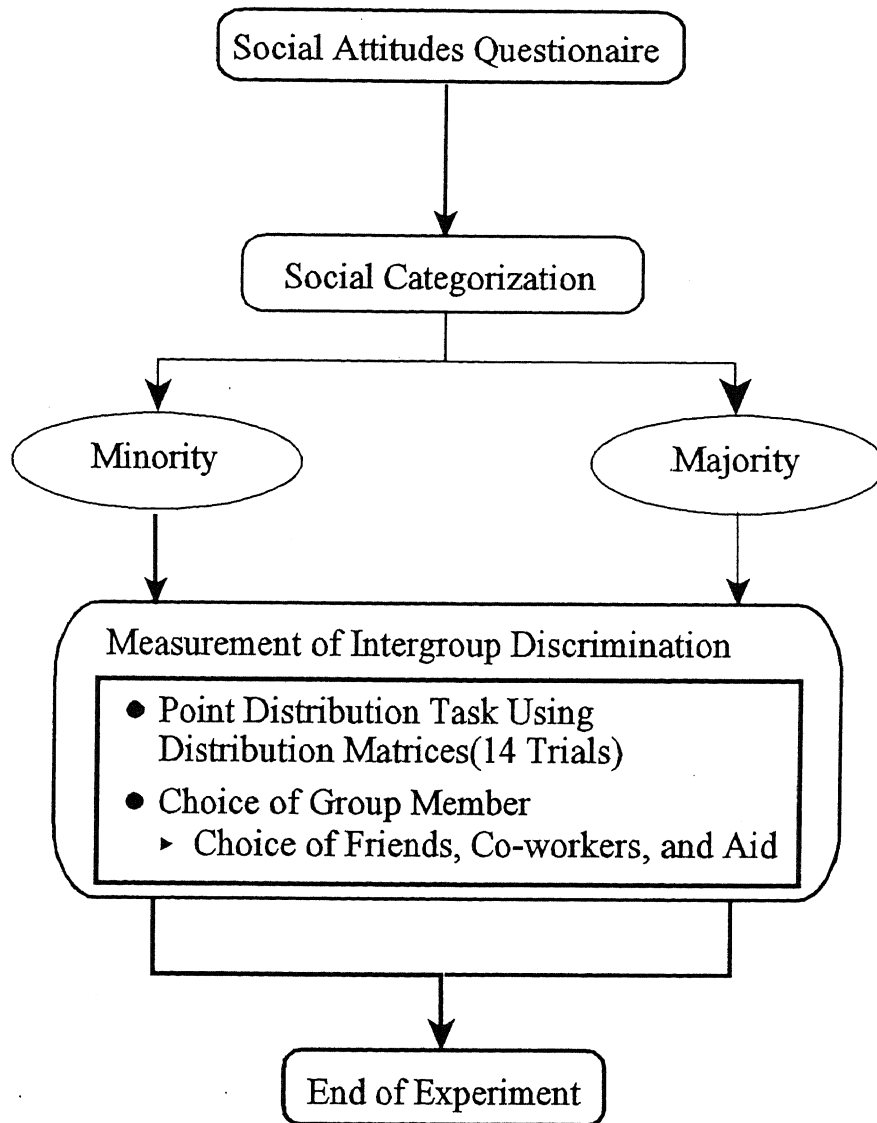


Figure 7.5 Flowchart in Study 3



Table 7.5  
Six items of social attitudes questionnaire used in Study 3

1. エイズに関する学校教育は重要だが、コンドームを配布するのは行き過ぎだと思う。
2. 脳死患者からの臓器移植を行うため、制度の改革は早く行われるべきである。
3. 広く浅いつき合いよりも、一部の人と親密につき合うほうがその人にとって有益である。
4. いくらマスコミが騒いでも、社会問題の解決の役にはならない。
5. 学校も含め、公的機関では全面的に禁煙とすべきだ。
6. 資源の再利用に使われる費用が価格に添加されたとしても、それは仕方のないことである。

*Note.* For each items, subjects rated their attitudes on 8-point scale (agreement - disagreement).

## 結 果

**得点分配行動** 4種類のプル得点の平均値を筑波大学および大正大学のデータごとにTable 7.6ならびにFigure 7.6に示した。「内集団びいき」については、「母平均値=0」を帰無仮説とする $t$ 検定、その他についてはWilcoxonの符号つき順位和検定を少数派・多数派ごとに行った。その結果、

少数派に関し、筑波大学のデータでは( $n=34$ )、「内集団びいき」( $t(32)=3.30$ ,  $p<.01$ )「内集団びいきvs.公平性」( $z=-3.15$ ,  $p<.001$ )「内集団びいきvs.最大共同利益」( $z=-1.88$ ,  $p<.05$ )「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」( $z=-2.78$ ,  $p<.01$ )のすべてで、有意な内集団びいきが見られた。大正大学のデータでは( $n=44$ )、「内集団びいき」( $t(43)=4.25$ ,  $p<.001$ )「内集団びいきvs.最大共同利益」

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
7.2 価値性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

Table 7.6  
Mean pull scores in Study 3

Pull Score	Group Membership			
	Minority		Majority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
University of Tsukuba <sup>a</sup>				
FAV	1.55**	2.69	0.46	2.18
FAV on F	2.63***	4.27	1.83**	3.68
FAV on MJP	2.18*	5.05	1.02	3.50
MD on MIP+MJP	1.93**	3.75	1.31*	3.46
Taisyo University <sup>b</sup>				
FAV	1.40***	2.18	-0.10	2.21
FAV on F	0.99	4.03	0.52	2.85
FAV on MJP	2.06***	3.67	0.84*	3.09
MD on MIP+MJP	1.83**	3.78	0.87*	3.20

*Note.* The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

<sup>a</sup>  $n=34$  for each group.

<sup>b</sup>  $n=44$  for each group.

\*  $p<.05$ . \*\*  $p<.01$ . \*\*\*  $p<.001$ , One-tailed.

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
 7.2 価値性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

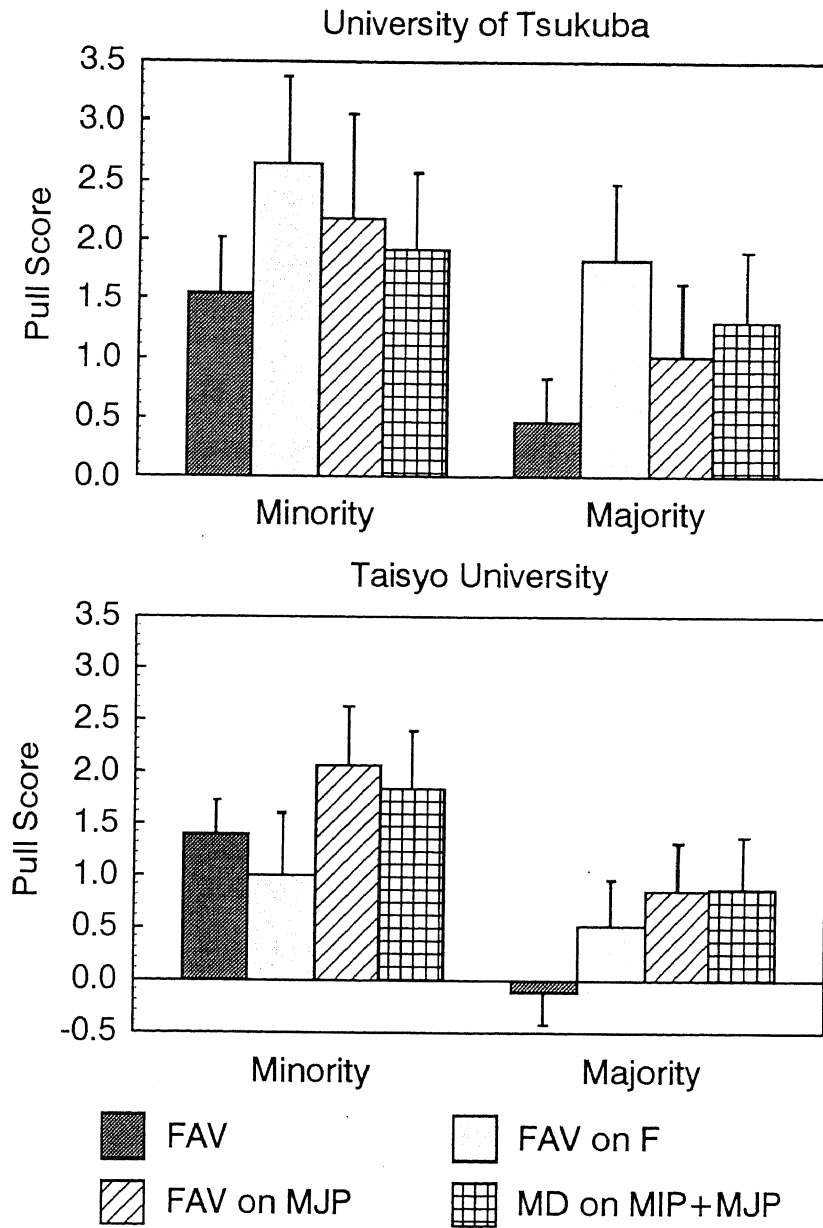


Figure 7.6 Mean pull scores in Study 3

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
7.2 価値性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

( $z=-3.35, p<.001$ )「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」( $z=-2.75, p<.01$ )の3つで,有意な内集団びいきが見られた。

一方,多数派について見ると,筑波大学のデータでは( $n=34$ ),「内集団びいきvs.公平性」( $z=-2.54, p<.01$ )「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」( $z=-1.76, p<.05$ )の2つで,有意な内集団びいきを示した。大正大学のデータでは( $n=44$ ),「内集団びいきvs.最大共同利益」( $z=-2.07, p<.05$ )および「最大差異vs.最大内集団利益+最大共同利益」( $z=-1.79, p<.05$ )の2つから,有意な内集団びいきが見出された。

また,内集団びいき得点についても,平均値をTable 7.7ならびにFigure 7.7に示す。「母平均値=0」を帰無仮説とする $t$ 検定を行った。その結果,筑波大学のデータでは,少数派( $M=34.45, t(32)=3.28, p<.01$ )だけでなく多数派( $M=17.09, t(31)=2.08, p<.05$ )も有意な内集団びいきを示した。大正大学のデータでは,少数派のみ有意な内集団びいきを示し( $M=25.91, t(42)=3.98, p<.001$ ),多数派では内集団びいきの傾向が見られた( $M=7.37, t(42)=1.54, p<.10$ )。

**集団成員の選択**3つの選択場面(友人選択協働者選択,援助者選択)における内集団および外集団の選択率をTable 7.8ならびにFigure 7.8に示す。各場面において,「内集団の選択率=.50」を帰無仮説とする二項検定を少数派・多数派ごとに行った。その結果,筑波大学のデータでは,友人選択および援助者選択で,少数派が内集団を有意に高い割合で選択した(順に, $p=.0004, .029$ )。これに対し,多数派は協働者選択および援助者選択で,内集団を有意に多く選択した(ともに, $p=.001$ )。同様に,大正大学のデータでは,友人選択でのみ,少数派が内集団を有意に高い割合で選択した( $p=.007$ )。これに対し,多数派は協働者選択および援助者選択で,内集団を有意に多く選択した(順に, $p=.011, .048$ )。

以上の結果を見ると,研究を実施した大学の違い,および,得点分配と集団成員の選択という従属変数の違いにかかわらず,少数派も多数派も,ともに多く

Table 7.7  
Mean ingroup favoritism scores

	Group Membership			
	Minority		Majority	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
University of Tsukuba <sup>a</sup>				
IFS	34.45**	60.34	17.09*	46.56
Taisyo University <sup>b</sup>				
IFS	25.91***	42.67	7.37 <sup>+</sup>	31.43

*Note.* The more positive the score, the more favoritism to the ingroup; the more negative, to the outgroup.

\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$ . \*\*\*  $p < .001$ , One-tailed.

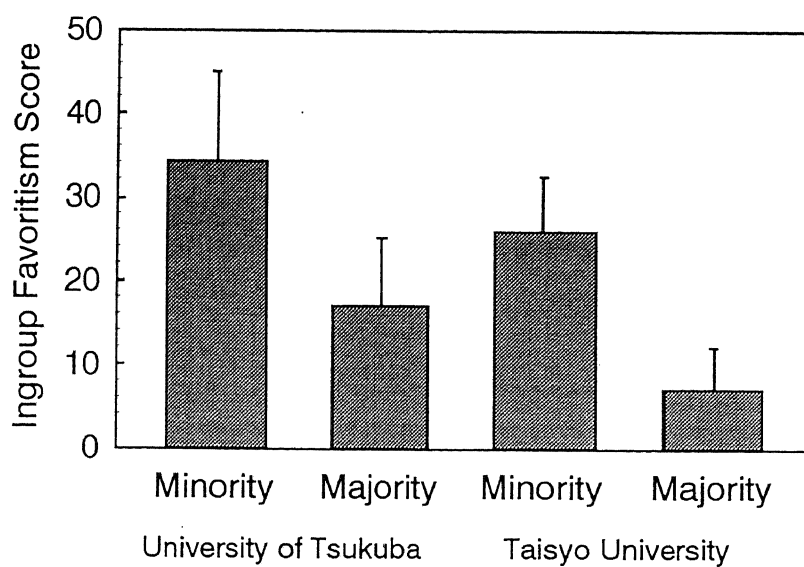


Figure 7.7 Mean ingroup favoritism scores in Study 3

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
 7.2 価値性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

Table 7.8  
 Choice rate of group members

	University of Tsukuba		Taisyo University	
	Minority	Majority	Minority	Majority
Choice of Friends				
Ingroup	79.41	60.61	69.77	56.82
Outgroup	20.59	39.39	30.23	43.18
Choice of Co-workers				
Ingroup	58.82	78.79	62.79	68.18
Outgroup	41.18	21.21	37.21	31.82
Choice of Aid				
Ingroup	67.65	78.79	62.79	63.64
Outgroup	32.35	21.21	37.21	36.36

第7章 少数派—多数派のカテゴリー化と集団間差別行動  
 7.2 価値性に基づく社会的カテゴリー化と集団間差別行動

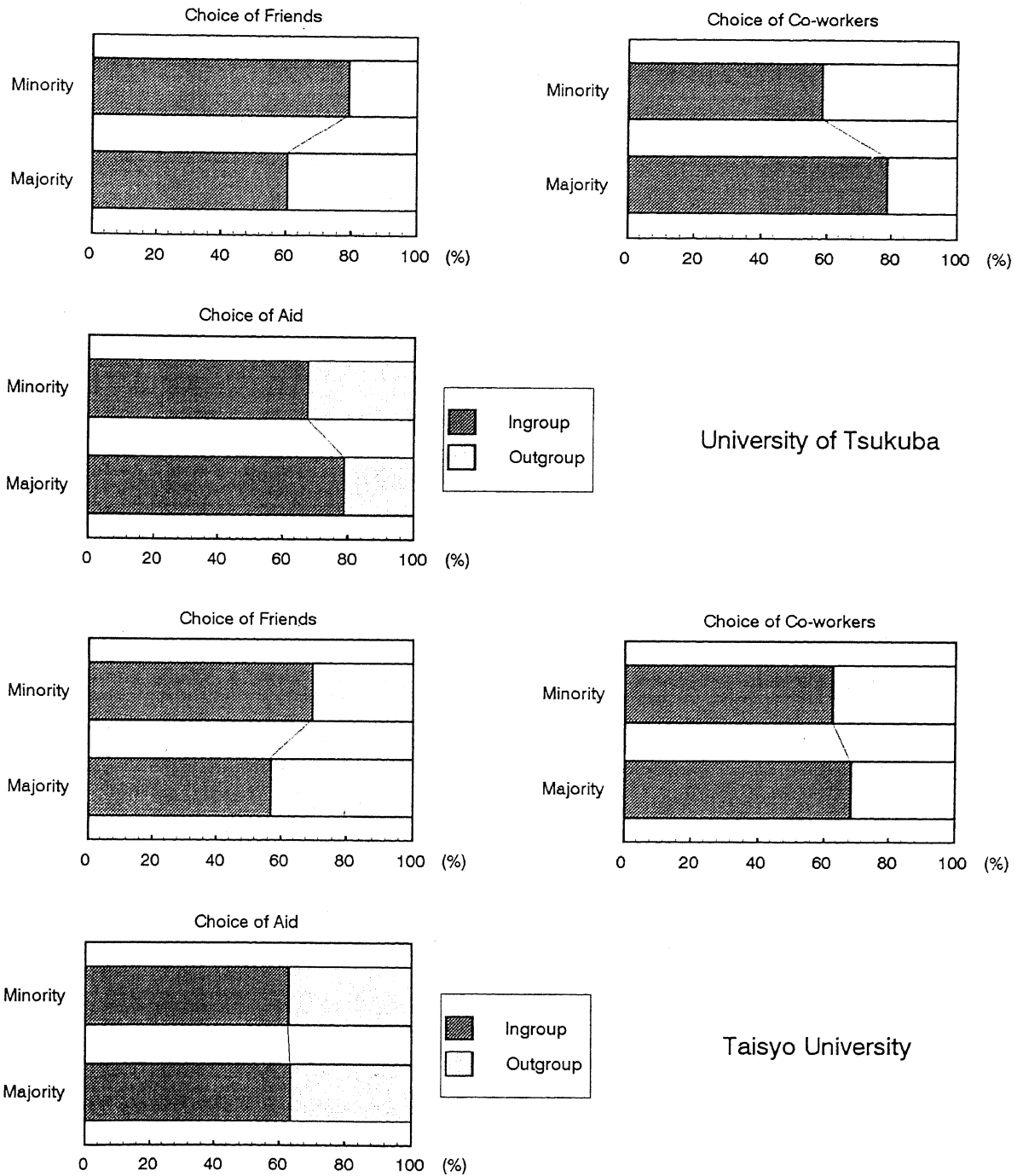


Figure 7.8 Choice rate of group member for the majority and minority in Study 3

の指標で内集団をひいきし外集団を差別したことが明らかにされた。したがって、仮説1および仮説2は支持されたといえる。

## 考 察

本研究の結果から、当初設定された仮説1「少数派は内集団をひいきし、外集団を差別するだろう」および仮説2「多数派もまた、内集団びいき—外集団差別を示すだろう」はほぼ支持されたといえる。すなわち、研究を実施した大学の違いにかかわらず、得点分配行動において、多くの指標から、少数派だけではなく多数派もまた内集団びいきを示したことが明らかにされた。また、集団成員の選択でも、少数派・多数派の両方が、外集団よりも内集団の成員を選択しがちであることが示された。研究2では、偶然性により構成された多数派が、ほとんどの指標で有意な内集団びいきを示さなかった。これに対し、社会的態度によって構成された多数派は、明確に内集団をひいきし外集団を差別する行動を示した。カテゴリー化基準が価値性を含むことによって、価値の対立が生じ集団間の関係はより対比的にとらえられる。加えて、特に「社会的態度」のカテゴリーでは、態度の正当性の点で(ある集団の態度が正しければ、他は正しくないことになる、という意味で)、集団間関係がより競争的に知覚されることも考えられる。以上の理由から、社会的態度に基づく社会的カテゴリーでは、異なるカテゴリー間の差異性および自身の集団性が明確化されやすかったと思われる。そして、この集団性の意識の高まりに呼応して、少数派だけでなく多数派もまた内集団びいき—外集団差別という集団間行動を示したものと考えられる。



### 7.3 まとめ

この章では、最小条件集団状況において「少数派—多数派」という集団サイズの点で格差の見られる集団間関係を設定し、両者の集団間行動を検討した。あわせて、研究1で得られた社会的カテゴリーの基本類型をもとに、「符号による社会的カテゴリー」(くじ引き)と「価値性に基づく社会的カテゴリー」(社会的態度)という2種類のカテゴリー化基準を用い、社会的カテゴリーの性質と集団間差別行動の関連が検討された。

社会的アイデンティティ理論では、個人が自身の集団性を顕在化させ意識化する程度に応じて、「内集団びいき—外集団差別」が示されると考える。研究2のように、くじ引きで少数派と多数派にカテゴリー化した場合、導入されたカテゴリー自体に特定の価値性が結びつくわけではない。そのため、集団性の意識化に影響を及ぼす可能性があるのは、少数派—多数派という集団サイズの格差自体の効果のみである。そして、知覚論的観点および心理的勢力関係の観点から考えると、より小さい少数派は図のような存在で、弱く不利な立場におかれると知覚されるため、自身の集団性を意識しやすいと考えられる。一方、多数派は、地のような存在であり、より安定した立場におかれていると知覚されるため、自身の集団性を明確化しにくいと考えられる。以上より、少数派は、自身の集団性を意識しやすいため内集団びいきを示すが、集団性を意識しにくい多数派は、明確な内集団びいきを示さないと予測される。分配マトリックスを用いた得点分配行動および集団成員の選好から、これらの予測は支持されることが明らかにされた。

これに対し、社会的態度によって少数派と多数派にカテゴリー化した場合(研究3)、価値の対立により少数派だけでなく多数派もまた、自身の集団性を意識しやすく、内集団びいきを示すと考えられる。そして、得点分配行動および集

団成員の選好の結果は、仮説を支持するものであった。以上のように、社会的カテゴリーが何らかの価値性に基づくものである場合、符号による社会的カテゴリーのときに見られたような集団サイズ自体の効果に、さらに価値の対立による集団間差異の顕在化の効果を加えられることが示唆された。